(9)　☆12版★　1991年(平成3年)2月18日(月曜日)　読売新聞　読書　「読売新聞」91・2・18　(第三種郵便物認可)

読書

BOOKS WEEKLY

瀧口修造の見ていた世界

日本人としてのシュールレアリスム

赤瀬川 原平

「コレクション瀧口修造」が発刊された。全十三巻別巻二巻で、みすず書房からである。

これを記念して、池袋のスタジオ二〇〇でシンポジウムが開かれた。公開座談会みたいなもので、出席者は秋山邦晴、巖谷國士、大岡信、そして私（何故か全部ア行だ）。

会場はぎっしり満員で、若い人が多いので驚いた。その中に初老の人々が目立ち、中間層の見えないのが特徴だった。

私は討論などできるたちではないのだけど、いまの若い人たちは瀧口修造といっても知らない人が増えてきているので、エピソードなどを話すことで少し距離を縮めようというような役目である。

もう亡くなってから十年たっているのだ。何だか懐かしいと思う。懐かしいというのは、瀧口修造が綿密に目を見張っていた時代が懐かしいのである。つまり十年前まで、私には、瀧口さんが見ている、という感覚があったのだ。その感覚で、自分のやることが伸びたり縮んだりしていたような気がする。

もちろん瀧口修造が亡くなっても、世の中はいろんな人が見ていろんな人がものをいっている。でもやはり瀧口修造が見ている世の中からは、もうちょっと別のものが生まれたのだ。

宗教の世界では、神はすべてを見ている、という感覚があるのだろうが、もちろんそんな超越的なものとは違う。

ちょっとこういう書き方は観念的になるのでやめるが、私がそのシンポジウムの席で言ったのは、「瀧口修造は微妙です」ということだけだった。その微妙さは何か、どう微妙なのか、それを話さなければいけないのだけど、それがじつに難しい。私の話は消極的だし、とてもそこでは話せなかった。

以前にもある雑誌の「瀧口修造特集」で、私も瀧口修造について書こうとしながらその微妙さの質につき当たり、それをどう書けばいいのか、恐ろしく難渋したのを覚えている。

唐突だが、以前宮武外骨の出版表現について書こうとしたときにも、その面白さをいかに書けば伝わるかと、恐ろしく難渋した。そこにも共通しているものがあるように思う。

つまり文字や論理に掬（すく）い取れないような実体的な要素が濃厚にあるのである。その要素が綿密にひろがっている。

もう一つ唐突ついでに、小林秀雄のカセットテープを例に出そう。生前の講演を録音したものだが、これがじつに、小林秀雄について何も知らない人にも面白い。私が事実そうだったのだが、しかしこれをテープで聞かずに活字に起こしたもので読んだとしたら、そこから受け取る力は確実に何十パーセントか削られてしまうだろう。

つまりそうやって消えていく分が問題なのであり、それを同時に掬い取ろうとするとつい「微妙だ」となるのである。

結局まだ何もいっていないことになるが、これから活字とはいえ瀧口修造十三巻が出る。いままでほとんど読んでいなかった私も、これから読むことが可能になった。

瀧口修造といえば、シュールレアリスムのことをどうしても近くに考えてしまう。最近あまりこの言葉を聞かないが、別に蒸発したわけではない。

シュールレアリスムというのは、意識が無意識をのぞく構図だと、私はとりあえず単純に解釈している。

ちょっと変な言い方になるわけだが、とにかくそこのところで「微妙」が無視できぬものとなってくるのだ。

私個人としては、それがなんであるのか散沙雲俘生であるトマソンや路上観察物件が、瀧口修造の目と入れ違いになったことを悔やむのだけど、これは仕方がない。というより、いま復活しつつある瀧口修造の文章に接すると、トマソンもあとちょっとでそこに露頭するものであったと、そんなことがスリリングに読み取れるのである。

（画家・作家）

ありし日の瀧口修造（一九七三年九月二十三日、米フィラデルフィアで）

これは西洋的意識の発達の頂点に発生したもので、意識の強力な後押しによる。一方日本では、その無意識というものと無意識的につきあう流儀のようなものが、古来より楽しまれてきている。書や水墨画というのは偶然性に向けて開かれた方法であるし、本来のお茶やお花の世界もそうだ。つまり無意識というものをあくまで意識でとらえるか、それとも無意識的につきあうかの二つがあるわけで、そのときに瀧口修造は、シュールレアリスムと接しながら日本人であるところが、じつに興味深いと思うのである。

「微妙さ」ゆえの効用

論理で掬い切れぬ濃厚さ

教筆時間

小林信彦さん（作家）

またも新趣向「性、陰謀、憲法…」

書きおろしの『世界でいちばん熱い島』が刊行されたばかり。これまで手がけた小説とは一種趣が異なる。

「話に吸い込まれ、一気に読めるストレートな小説を書こうとつとめました」。作者の弁である。

南方の島、コロニア共和国が舞台。〈アメリカと日本の間に宙ブラリンになった男〉の恋と陰謀に満ちた冒険がミステリアスに描かれる。

「熱い」には三つの意味をこめた。文字通りトロピカルの島であること。非核憲法とアメリカとの自由連合協定をめぐる国内の内戦、経済戦争などといった政治状況。そしてセックス。

主人公をめぐって三人の女性が登場し、主人公のフェティシズムが描写されるが、「性」に支配される男の姿といったものを書いてみたかった」ともいう。

『オヨヨ』シリーズや『ちはやふる奥の細道』といったユーモア作品を世に出す一方で、『夢の砦』などシリアスな純文学を発表。五年前の作品『ぼくたちの好きな戦争』では太平洋戦争で日本人がいかに楽しんだ部分があったのかを戯曲化して描いてみせた。

「小説を純文学、エンターテインメントという二分法だけでとらえるのは実情に合わない」が持論。「読んでひかれるところがあればいいではないか」

次の作品は東京の土地、家の問題がテーマ。「ブラックユーモアになるのではないかと思います」（加）

＝新宿副都心で

撮影・松永 康三

乱読精読

東欧激変えぐる「山内歴史学」

中嶋 嶺雄

現在は、二十世紀のなかでも、もっともドラマチックな歴史の旋回期だといえよう。中国の悲劇を代償とした東欧社会主義圏の崩壊は次にソ連邦の解体をもたらしつつあり、こうした脱二十世紀的潮流はユーラシア大陸を一巡していまやモンゴルにまで及んでいる。

この歴史の関頭に立って、われわれが歴史家に求めるところは大きいのだが、かつてあれほど饒舌（じょうぜつ）であった歴史家たちは、なぜか寡黙であり、あるいは中世の生活史やフォークロアに逃避してしまっている。

山内昌之の新著『ラディカル・ヒストリー』（中公新書）は、このような問いに、深く耕された知的土壌とロシア史とイスラム史の交錯する広域的世界認識の時空において、全面的に答えてくれる意欲的作品である。

もとより、本書によって読者は、あれほど野心的に登場したゴルバチョフ体制が、なぜいま民族問題でこれほどの傷を負わねばならないのかというソ連史の原点、つまりスラブ＝イスラム文化圏ないしはスラブ＝トルコ政治経済圏という広域的世界における民族問題と宗教問題の引き裂かれた構図のスケールに想いをはせることもできよう。

だがそれ以上に本書は、ともすればイデオロギー終焉（しゅうえん）後の黄昏（たそがれ）時の緩り言になりがちな歴史学とは本質的に異なる豊かな色彩感覚において、歴史学と地域研究のまったく新しい広大無辺のフロンティアを読者に垣間見せてくれるという意味でも、ラディカルなのだ。

（東京外国語大学教授・国際関係論）

話題の一冊

アレクサンドル・カバコフ著　ノーリターン

行くも止まるも地獄　ソ連流!?近未来小説

ザミャーチンの反ユートピア小説「われら」がソ連で解禁になったのは、作品が書かれた六十八年後の一九八八年だった。その同じ年、この小説「ノーリターン」が書かれたというのは興味深い事実だ。ちなみに、「われら」が千年後の統制され均一化された「単一国」を描いたのに対して、「ノーリターン」は五年後の一九九三年十一月のモスクワを描いた近未来小説である。しかも、主人公は現在と未来を自由に行き来し、最後に未来を選ぶというのだから、反ユートピア小説とは連が違う。にもかかわらず、この嗜さは、ソ連における未来小説の系譜を思い起こさせるのである。

主人公の推計学者は、突然現れた二人組の男に強要されて五年後のモスクワに旅だち、そこの有り様を報告する。モスクワの夜は雪が舞い、装甲車が動き回っている。ラジオは新しい政党の設立総会とペルシャ湾での核攻撃を伝えている。人狩りやリンチが横行する内戦状態のモスクワの夜を主人公はさまよう。夜明けにたどり着いたクレムリンの壁ぎわには、巨大な土台穴と無数の小さな穴があいているばかりである。そのクレムリンに統治者バナエフ将軍の車が入って行く。

行くも地獄、止まるも地獄。しかし主人公は妻とともに未来のモスクワに逃げ込む。二人組が追って来ても、ここなら逃げられる。なんとも暗い未来小説だが、ソ連で大評判になったという。小宮山俊平訳。（新評論、一四〇〇円）（省）